

将来の生活像を描きにくい 現代社会と世代間の意識差

今号では、「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」の結果をもとに、持続可能性と生活満足について、特に世代間の意識差などに着目し、多面的な分析を試みている。今回の座談会では、精神科医としての豊富な臨床経験のもと、現代人の心の問題を探究されている香山リカ先生にお話をうかがいながら、エネルギー・文化研究所(CEL) 研究員と現役大学生を交えたトークを通して、「持続可能性と生活満足」に関する若者と中高年層の意識差などを浮き彫りにしつつ、共にその問題点を探った。



香山リカ Rika Kayama

精神科医、評論家、立教大学現代心理学部映像身体学科教授。1960年札幌市生まれ。東京医科大学卒業後、市立小樽第二病院勤務、神戸芸術工科大学助教授、帝塚山学院大学教授などを経て現職。現代人の心の問題のほか、政治・社会評論、サブカルチャー批評など幅広いジャンルで活躍。著書は、『くらべない幸せー「誰か」に振り回されない生き方』、『今のあなたで大丈夫！—自分に無理をさせない生き方』、『人生の法則』など多数。

出席者(敬称略)

香山 リカ 立教大学現代心理学部教授

小林 詩織 立教大学文学部史学科4年生

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)

多木 秀雄 同研究所 所長

当麻 潔 同研究所 研究員

豊田 尚吾 同研究所 研究員

山下満智子 同研究所 研究員

弘本由香里 同研究所 特任研究員





多木 秀雄 Hideo Taki

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 所長

自分の将来像を描いていくことが 難しい社会

多木 今日は皆様ありがとうございます。CEL94号では、私どもの研究
所で行った生活意識調査の結果をレポートしており、今回は特に世代間
の意識差を問うということで特集を組んでいます。現在は、将来が見え
にくい社会になっていると思われませんが、その中で、若者たち、次世代の
生き方について、どんな現象が現れてきているのか、香山先生からご
意見を聞かせていただき、また今日は現役の大学生の方にも来ていただ
いていますので、若い方の本音や実感を話していただければと思います。

香山 生活という話になってくると、それぞれの世代特有の、社会背景や
経済状況とのかかわりが大きいですね。そう考えると、日本が高度成長
からバブルという経済的な栄華を極めた時代をよく知っている人たち
と、それ以降の就職氷河期とかの世代では、かなり違うのではないかと
思います。若い人は将来に夢を持ちますが、バブル以降に物心ついて成
長してきた人たちは、なかなか自分の将来像を描けないのが現実です。
特に、いわゆる冷戦が終わり、政治闘争ではなくてグローバル経済の中
でどこが生き残っていくかという時代になってからは、大きな物語の中
で自分の将来像を描き、社会に自分自身を位置づけていくことがで

きなくなっています。だから、個人として、目の前のこととどうやって勝ち続けていくかということだけが重視されがち。個人の努力によって、いかようにも人生を展開できるというような幻想も

ありますが、私も診察室などで見ていると、目の前の競争で一喜一憂しながら、給料が上がったとかといってステップアップしているつもりでも、30、40代になってくると、どこかで「私は何のためにやっているんだらう」と疲れが出てくる。そういう意味では、一見、昔より今の方が自分の人生を計画通りにやっていると見えるように見えますが、そうした個人的な目的なども、他者との比較の中でだけ成り立っています。

多木 今は若い頃から受験勉強に追われるなど疾走している、ひたすら走っているように思います。自分が人生をどういうふうにも歩もうかと立ち止まってじっくりと考えることが少ないように感じます。

香山 教育もそうですし、社会全体もインターネットを含めたテクノロ
ジーがこれだけ普及する中で、即座に状況を判断するという生き方を
していくことが必要と思わされている。学生たちを見ても、授業の選
択などでも、今はオンラインで登録できる。自宅でもできるので便利
ですが、厳密な期限があつて、その期限を1秒でも過ぎると登録でき
なくなってしまう。だから、いろんな授業を試してから決めるという
こともできない。就職も今、1年生のうちからキャリア教育をして、将
来設計の意識を高めようとしている。考える期間は長くなっているの
ですが、ずっとせき立てられているような感じですね。

多木 今はコミュニケーションでも、携帯電話やメールが発達して、居
場所や時刻に関係なくコミュニケーションできるという便利さの反面、そ
れによってますます忙しくなってきましたね。以前は、手紙とか、
せいぜいファックス程度でしたので、内容をよく考えて送り、返事が
戻ってくるまでに時間的余裕があった。今は、メールを受け取るとす
ぐに返信しないといけないという切迫感があるようですね。便利にな
ればなるほど考える時間が少なくなるという感じがします。

香山 ええ。IT企業とかだとパソコンを立ち上げれば、会社じゃなく
ても、どこでも仕事ができってしまうので、一見、解放されているように
見えます。けれども逆に、退社したらその日の仕事はお終いではなく、
24時間、仕事に気がなつて、目に見えない残業時間に記録されないよ
うな行動が増えている。

多木 昔ですと、せいぜいポケットベルが鳴るくらいでしたね。

香山 私の父は医者でしたが、家で患者を見ていて、昔、ポケットベルもなかった時代には、どこに行っても公衆電話から「今、ここにいるよ」と連絡を入れていました。心理的に窮屈だと思いますね。それが今度は、何かあったらポケットベルが鳴るということで行動範囲が広がり、携帯電話が

できてからはさらに広がった。それを拘束ととらえるか、解放ととらえるか。10年前の社会心理学的な調査では、半々の結果でした。気にせずどこへでも行き、「何かあれば連絡がくる」と考える人と、逆に会社から縛られていると感じる人と、その人の性格にもよるようです。

山下 今だったら、拘束されていると感じる人の方が多いでしょうか？

香山 どうでしょう。その前の不便な経験があったからこそ解放されるのでしょうかね。今の若い人はデジタル・ネイティブと言われている人たちで、前の時代のことを知らない。ただ、逆に今、学生からよく聞くのですが、携帯電話を忘れると、すごく不安になって授業が欠席になってしまうから取りに帰るとか。

山下 私も、携帯電話を忘れて会社に向かったりするとすごく不安ですね。

香山 以前、私も失敗したんです。メールで連絡をもらっていた患者さんがいたのですが、ある日、私は携帯電話を忘れて病院に行っただけです。実は、その日はその人の診察日。ところが何かで都合が悪くて、「今日は行けません」というメールを私に送っていた。なのに返事がないので、その人は悩んでしまったようで、私が家に帰って携帯電話を見たら、何通もメールが届いていました。ひとりであれこれ考え、葛藤があったようです。

豊田 私もメールの場合は、返事が1日遅れると、なぜ遅れたかの理由



小林 詩織 Shiori Kobayashi
立教大学文学部史学科4年生

を書かないといけないように感じますね。

香山 そうです。学生から受け取ったメールの返事でも、半日くらい遅れると「何か、僕、悪いことを言いましたか？」みたいなメールが来てびっくり。

小林 私も、気にする人に対しては、すぐにメールを返すようにしています。サークルとかでメールの一斉配信もあるので、それを見ないと情報が入ってこない。4年生です。何より就職活動中はメールがないとエントリもできないので、常に待ち構えていました。予約が開始された途端に入らないと、殺到して1分程で締め切りになるので、皆、それにかじりついて。

香山 何次面接に受かったとかいう、企業からの連絡に対しても、パッととらないとだめだとか。

小林 連絡がとれない人は後回しにされてしまうようです。後で連絡してくださるところもあるのですが、受ける方も気分がとがっているので、お風呂にまで携帯電話を持って行って、すぐに出られるようにしているという話も聞きます。

当麻 人事担当者としては、むしろ鷹揚な、ゆったりした人を採用する方がいいようにも思いますが、他社との競争が激しく人材を早く確保したいというのがあるんでしょうかね。私の時は、理系の就職の場合、大学の先生の推薦状がないと受けられないようなことがあって、1社しか受けることができなかったですね。その1社からの連絡のみをゆっくり待つていけばよかったです。

弘本 本来は人々の生活にゆとりを生み出したり、社会参加の機会を増やしていくために、活かされていくはずの技術が、逆に社会から人間を疎外していく方向へ暴走してしまいかねない。社会や生活の変化のスピードが激しくなればなるほど、技術に託された本来の使命を伝えていく努力が必要になってくるのではないかと感じます。また、若者たちの仕事と人生観が矮小化しているように感じられることも気がかりです。あるワークシヨップで、就職に苦労している若い人たちが、自



当麻 潔 Kiyoshi Touma
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員

分たちのことを、回転寿司の皿に乗っている寿司に喩えているというのです。1週目に取ってもらえないと、2週目3週目になるとどんどん商品価値が下がっていくと。笑い話ではなく、まじめに追い詰められているのです。

小林 ええ。大企業は4年生の4月が就職活動のピークで、5月のゴールデンウィーク明けに決まってくるんです。そこで失敗すると中小企業のセミナーに参加し、6、7月になると「何故受からないのだろう」と。面接でも、それまでの就職活動の状況を尋ねられる。「なぜ落ちたの？」と。すると余計、お寿司のように、2回目3回目のクールの人たちは「自分が悪いんじゃないか」と、人格が否定されていると感じて悩んでしまう。

当麻 スタートダッシュが大事なんです。3年生になれば、みんなすぐにスタートするのなら、学生生活を楽しんでる余裕もなくなってしまう。

多木 先程「疾走している」と言いましたけれど、周りが走るからとにかく自分も走っておかないとだめだと、ずっとせかされているという感じがしますね。

山下 その割には離職率が高いですね。そんなに一生懸命やっているのに。

豊田 よく考えずに入社し、そんなはずじゃなかったということでしょう。

2000年代初めまでは別の就職氷河期があつて、ロスト・ジェネレーションと呼ばれました。それから10年くらい経っていますが、その頃の学生が30代になつてきています。その世代の人たちの精神状態は、それほど深刻な形

ではないのでしょうか。

香山 子どもの時にバブルの話を開いたりしているから、割を食ったという気持ちもあるし、でも何か、またよくなるかもしれないという一縷の望みもあるようです。でも今の20代は、「またよくなる」という希望さえ持てないのでは。

小林 そうですね。現段階で言うと、就職に関しては厳しいです。たとえ大企業でもグローバルな競争の中で、会社自体の将来もどうなるかわからない。就職活動前は自分なりにステップを考えていたのですが、それもどんどん変わってきてしまった。5月頃に一番行きかけたところと相思相愛になれなくて、またお断りした先もあり、今、大学院進学のことも考えていて、最初に考えていたスタイルとは全然違ってきています。

自己の成長を促す多様な価値観との出会い

香山 大学で「女性就労とワークライフバランス」という授業があり、私はそのコーディネーターをしたのですが、ゲストで来られるのは、「うちの会社では、女性にもずっと仕事を続けていただける仕組みをつくってきた」という大企業のパイオニアの方たち。1、2年生で将来の人生設計もまだ考えたことがない女子学生たちにとっては、自分の将来を考えるきっかけにはなる。ただ結局最後は、「大企業に入れたらだよ」という話になりがち。「就職でも結婚でも、そんなにうまくいくわけでもない。だからといって失敗とか負けということではなく、いろんな生きかたがあるんだよ」と言うと、今度は逆に、学生の方が「やっぱり自分はだめだとわかった」になっちゃう。その意味では、多様な選択肢がある時代と言っているのに、ライフコースが一元化されている。一旦、就職活動のレールに乗っちゃうと、大手の企業に入ることとか、その中の勝利という感じで、そうじゃないと自信がなくなっていくような仕組みなんです。

山 うまくいった人に対する憧れを持つのは大切ですが、そうなれるのは100人に1人。だから、あとの99人には、それでも自己肯定感を持ちながら人生を歩んでほしいですね。

豊田 若い人たちにはお金は稼げなくてもやり甲斐があるとか、社会に貢献するとかいう面にも目を向けてもらいたい。ただ、今の社会の評価のシステムが、お金を稼げるかどうかを基準にしてしまっているのでも、それに縛られざるを得ないところが難しい。

香山 女子学生の就職で、ベンチャーや小さな会社でやりたい仕事を選ぼうとしていた学生が、特に母親からの一言で、大手の一般職を選択してしまうというのがありますね。私が今いる学科でも、映画をつくりたいとか、テレビ制作会社に行きたいという学生がいるのですが、そういうところに決まっても、別にメガバンクの一般職に決まると、母親は「そっちの方がいいわ」とつい言っちゃう。母親がすすめると、簡単に「そっちの方がいいかな」になっちゃう。

多木 私は就職してから30余年。今思えば、多様な寄り道をし、時間をかけていろんなことを経験しながら歩む人生がよいように感じますね。特に20代であればいろんなことをやってみることができる社会になってほしいです。

香山 今は、大学を卒業して2年くらいは新卒として扱いますよという動きもあり、そうすると少しは変わるのではと思います。現状では、

ボランティアとか、世界を旅行してきましたとかは、キャリアにカウントされず無職扱いなんですね。

多木 人生では、結構そういうのが生きるんですけどね。多様な価値観に触れる機会、思った通りにいかないということを

経験した方が人間的に深みが増すように思いますね。

香山 大学の教員などは、私もそうですけど、最近アカデミックな場所でも研鑽してきた人ではなく、現場を知っている人が採用されるようにもなっていますね。

弘本 先日ドイツの大学生とその母親と話す機会があったのですが、ドイツでは就職にしても学生が一斉に就職活動するというようなことはなく、適当な時期に大学を卒業して、会社を自分で探して交渉し、あるいは求人に応募して入っていくというような形だと聞きました。だから日本の学生の就活の切迫感などはピンとこないようです。今は経済の低迷やグローバル化の影響で、教育や雇用も少しずつシビアになりつつあるのですが、それでもおおらかに自分の意思で学ぶことの方が社会にとって重要だという考え方が主流で、若者の意識も親の意識も日本とは随分違います。

豊田 日本の場合、変に色の付いていない新人を教育して、どんな職場でも通用するゼネラリストに育てる。それで組織の柔軟性を維持している面があります。企業規模にもよりますが、現在の雇用システムのもとでは、中途入社を大幅に増やすことは難しいようです。

弘本 専門性で応募して採用され、スペシャリストとして生きていくのとは全然違いますね。ドイツなどでは専門性と職業が密接に結びついているそうです。

当麻 娘が大学4年生ですが、見ていると、どうしても就職したいという気が感じられない(笑)。断られても、あまり気にならないようで、「別に、だめだったらいわ。好きなことがしたい」と。就職活動や授業よりもバイトや遊びの方が忙しいような感じ。こういうことを勉強し、将来、こういう仕事をしたいというのがないのかなと少し心配していますね。

香山 本人が楽しく過ごしているのなら、何かいい展開があるかもしれないよ。

小林 私は、就職活動中、全然うまくいかずに行き詰まっていた時に、いろんな方から「失敗しても非効率でもいいじゃない」と言ってもら



豊田 尚吾 Syogo Toyota
大阪ガス(株)エネルギー文化研究所 研究員



山下満智子 Machiko Yamashita
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員

求められる社会的ネットワークの再構築

えたことで、すごく救われたんです。人生一度きりだから、失敗はしたくないけれど、必ずしもうまくいくということが、いいこととは限らない。

多木 失敗というのは、できるだけ早い時期にしておいた方がいいですね。ある程度歳をとってからする失敗は、結構ダメージが大きいことがある。私は、子どもによく言っているのですが、うまくいかないことがあっても、それは天から、そういうことを経験しておきなさいと言われていると、プラスに考えればよいと。

香山 治療の中で、皆さんよく言われるのは、「後になってみると、あの時、そういう経験をしておいてよかった。人生に必要なだった」というもの。前向きな振り返りが必要ですね。

弘本 将来像が描きにくい社会の中で、親子の密着の長期化も特徴的な社会現象として現れてきているように思うのですが、どのように見ていらつしやいますか。

香山 70代でも、高度成長期を経てきた世代はタフですね。昔だったら親は隠居しており、一家の中心は40、50代の子の方ですけど、今はま

だ70代の方が親として君臨していて、パワーバランスが変わらないことがあります。この両世代の葛藤が問題になっていて、それで病院に来られる方も少なくなない。古い家族観を押しつけてくるのだったら反発もしやすいけれど、今は

70代でも意外に進歩的。人にもよりますが、「子どもが親の面倒をみるのは当然」みたいなことは言わず、「個人が大事」とはわかっている。ただ、そう言いながらも態度では子どもを支配していたり、どこかで「面倒みてよ」というようなものがあつたりする。ダブルバインド、口で言っていることと違つたりするのが厄介ですね。本人の中にも矛盾がある。

山下 私も今、同じような経験をしつつあります。両親にとつても老いていく状態は初めての体験。毎日が未経験で、その感情を直接にはぶつけませんが、どこか悲しみが深くなつていくようです。

弘本 2つの価値観を持つて生きてきた世代が、高齢になつて孤立しはじめていくという状況があるように思います。大阪のまちなかでも、近所づきあいの生活文化は、この数十年のうちにどんどん姿を消しつつあります。地域の子どもたちと大人たちの接点も、極端に少なくなつていきます。この夏、熱中症で高齢者が多く亡くなつていきますけど、かつてのお年寄りとは、夏の夕方になると、外に出てきたりして、涼んだりしていたものですが、今は外に出ることも少なく、なかなか様子があつかめないという実態があります。

豊田 所在不明の高齢者問題の例を見るまでもなく、各人が社会とのコミュニケーションをどうとつていくかということが、今後一層大きな問題になつてくると思います。

香山 テクノロジーに頼るコミュニケーションも増えてきており、高齢者でパソコンを使わない人たちは、どんどん情報から遅れて取り残されてしまふという現状もあります。アメリカ南部のハリケーンで洪水が起つた時でも、ネットで避難情報がいち早く流されるので、高齢者と低所得者の家が逃げ遅れた。一番情報が必要なのに、行き渡らない。ほんとうは、高齢になつて買い物がしにくくなつてきたら、ネットで注文するとかできたら便利なのに、必要な人たちには使いにくい。

山下 高齢者のみならず、社会的支援が必要な人に対して、社会的なサービスや資源をどう使うかということを考えていけないといけません。

香山 多重債務とか、DVとか、派遣切りとか、具体的な困難がある人が、どこに助けを求めにいったいかわからなくて、とりあえず精神科に来たという場合もあるんです。結局、どこにいったも行政は縦割り。社会的支援が必要な人や、弁護士とかの法的な支援が必要な人たちが、途方にくれている。貧困問題でも、実は日本はセーフティネットが案外整備されていて、いろんな支援が探せばあるそうです。ただ、そこにたどりつくまでが大変で、手続きとか、どこでやっているのかわからない。

当麻 その意味では、これから高齢者が増えてきて、困った時は、ここへ行けばあるいは連絡すれば、社会的支援が受けられるというような社会的ネットワークが整備されていくべきですね。

香山 そうですね。ひとつの困難を解決しても他にいろんな問題を抱えている人が多いんです。病気の問題とか子どもの問題とか。今、NPOの中には、ネットワークをつくって、どこかにいけば全体につながる仕組みをつくらうとされているところもありますね。

豊田 今の若者は、就職など、自分のことだけで手一杯のように見えます。そのような中、公的なこと、例えば貧困などの、社会が今、直面している課題が日常的话题の中に入ってくることは、あまりないのでしょうか？

小林 人によると思いますね。中には社会に貢献したい、役立ちたいと志を持っている人もいますし、どこでもいいからとりあえず就職したい、自分の生活が大事という人もいます。私は、最初は自己実現で、自分がしたいことをやっていくうちに、それが社会貢献になって、生き甲斐につながればいいなと思います。

香山 学生さんだっているんなことに関心があるだろうけど、今、こんなといった情報があるのに、社会にいろんな人がいるのを目にする機会が意外に少ない。でも、病院で相談を受けていると、弱者とか、



困難を抱えている人とかは、明日は我が身の存在、他人事じゃないのがよくわかる。いい大学を出てそれなりの企業にいたのに倒産したとか。結婚した相手が悪くて逃げ回っているうちに住所不定になっちゃったとか。そういう人って、努力してないとか、怠け者というイメージもあると思いますが、実際は誰がそういう困難に直面してもおかしくない。病気だってそう。いつ誰がどうなるかわからない。

未来に向け、 幸せの意味を改めて問い直す

弘本 他者の痛みを感じとる力、共感性が求められる社会だと思っておりますが、裏腹に共感性を育むことがとても難しい状況があるように思います。

香山 私は授業であまり出席をとらないんです。個人的には、授業を聴くだけが大学生活ではないから他に好きなことをやりたければやればよいと思う。だから出席点は低く、レポート点を高くしている。でも毎年、「出席を毎回とってほしい」という要望が出る。

小林 2人の学生がいて、全く同じ評価なのに、ひとりはずごく授業に出て、もうひとり遊び惚けていたら、それはズルイという心情。私も個人的には、頑張れば頑張る分、それは形として現れると思うんです。一度、頑張らなくても大丈夫と見えてしまうと、どうしても気持ち揺らいじゃうのではないかと思います。

豊田 起業家などは、事業を成功させるためには努力が必要ですけど、運も大きくかわってきますよね。結果として成功したとしても、一般の会社員の何十倍という、かなりの額の報酬を得ている人に対して



弘本由香里 Yukari Hiromoto
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 特任研究員

不公正だとは感じませんか？

小林 どんなに運があっても、自分で掴まないといけないと思うので、きちっと努力をして運がついてきて、それが結果につながっていること自体は悪いことではないと思います。

山下 ズルイというのは、どちらかというと、似た環境、同じところで競う時に思うのでしょうかね。

小林 そうですね。全く努力をしないで、コネなどでスルッと入社するのは、正直ズルイというか。でも半分、ちょっと可哀相だな。絶対後で後悔すると。努力して頑張ってきた方が伸び代が大きいので、何年か後には変わってくると思います。

多木 頑張ったからといって、すぐによい結果が出るものではないので、どれくらいのタイムスパンで努力の結果を見るのか。人生の中では、性急に結果を求めることは、あまりよくないという気がします。

香山 患者さんの中にも、仕事がうまくいかなかったりして悩んでいても、いろんな経験をして人格的に深みが出て、感心するような話をされる方がいる。そういう方を見ていると、ご自分の人生に満足されているかどうかかわからないですが、人格的なものを得たことは、人として生まれた上では幸せなことじゃないかと思うんですね。それは決して数字で評価されたりはしない。経済的にも恵まれない状況だけど、それ以上の喜びがあつて、深いところにつながっていく。そういうことが、幸せのもとではないかと思

いますね。

多木 目的地に行くのに、直線の道の上を走って行くのでなく、あっちへ行ったりこっちへ行ったりし、いろんな人に出合いながら行く方が楽しく、面白いように思います。

香山 ひよっとしたら、目的地にはたどりつかないかもしれない。一生、地位も名誉もないし、他人から見ると、バツとしないね、というのかも

もある。そのように考えられるようになったら、幸せだな。気休めではなくて、人の満足って何だろうと思いますね。社会的な成功とは関係ないですね。

豊田 ただ、「それもいいかもしれないけど、別のよさもあるね」というような多様な価値観を認め合うような社会には、今はあまりにもなっていない。そこに目を向ける人が増えると社会は大きく変わっていくように思います。

香山 そうですね。平凡なことですけど、軸はひとつじゃないってこと。そして、本人が幸せなら幸せということだけではなく、本人は普通のことと思っているかもしれないけど、でも幸せな状況だってある。

豊田 そういう幸せな暮らしの器は家族になるのか、友だちなのか、コミュニティなのか。人それぞれなのでしょうが、これからの暮らしを展望するとき、その受け皿について考えることは、その人の生き方に対する大きなヒントにつながるような気がします。

香山 その意味では、等身大のもので、目の前に見えて、互いに声をかけられて、手で触れられてという範囲の中で、どう生きていくのかということだと思えますね。ターミナルケアの現場で出会った人ですが、末期ガンで余命いくばくもない、ベッドの周囲しか動けない方でも、「昨日、水が飲めなかったけど、今日は飲めた、おいしいですね」と言われたり、「面会に来てくれて、きょうだいに久しぶりに会えてうれしかった」と話されているのを見ると、幸せって、狭いスペースでも実現可能なんだとつくづく思います。こんなに悲惨だから幸せではないということでは全くなくて。その意味では、何億円をバツと稼いだというのとは、レベルが違う世界がある。幸せの形は実はとても多様なんですね。

多木 世代を問わず、何が幸せなのかを、個人として、また社会的にも深く見つけ直していく必要がありますね。本日は、どうもありがとうございました。